
龍と書いてドラゴンと呼ぶ！ ～龍鎮め、夢と現実～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍と書いてドラゴンと呼ぶ！ ～龍鎮め、夢と現実～

【Nコード】

N4772H

【作者名】

雨月

【あらすじ】

人は皆一様に大地に脚を、蒼空に頭を向けて生活してる。龍もまた同じく、人と一緒に暮らしてきた、だが中にはご機嫌が悪い龍もいるわけで、残念ながらだめすかしたりしなくてはならないのである。些細なことだと思っていたら、気がついたときには手遅れにそんなことが起こらないように傷は小さいうちに治しましょう。

プロローグ（前書き）

小説タイトルに勢いだけでつけてしまったサブタイトルが今更悔やまれます。しかしまあ、どちらが上かわかってる人いるんでしょうかね？

ブローグ

ブローグ

一人暮らしというものは一度やってみないとその大変さが伝わりにくいことだと思うのだ。僕としての意見だが、まず気合いを入れてやろうとしていた料理だが今では安い弁当を探して四苦八苦しており、正直言って料理をするのは気が向いたときだけ、しかもあまりおいしくないときもんだ。

掃除だつて面倒だ。

毎日一人分を選択するのは非常にもつたいない気がするので土曜日の夜まとめて処理する。もしも日曜日が雨だった場合、月曜日はしつとりとした制服で学校へ行かなくてはいけなくなる。もっとも、夏場はポロシャツになるので月曜日着たものを風呂に入っている間に洗って干して水曜日に着ていかなくてもはならずもはや金曜日は面倒で水洗いだけとなったりしている。

そんな怠惰な？高校生活も大学合格を経てさて、生まれ変わるぞと思うときになって実家から連絡が入った。

僕の家系は少し変わっている、そして言うなら僕がこれまで豆につけてきた家計簿も変わっている。

そんな実家から帰ってくるようにという電話に一つ溜息をついて荷物をまとめ出したのは言うまでもない。だって、僕の生活費を出してくれているのは親だからねえ！文句を言つて生活費を断ち切れちゃったらどうなるかわかるでしょ？雑草で暮らすのにも限界があるんだよ、限界が。

P

気がついたら船に乗っていた。そう、船だ。

船が浮かんでいるのは黄金の海、海は空を映しているのだろう、だから空も黄金……いや、少し違う。

地平線より少し上に太陽を横長くしたものがそうだな、簡単に表現するならフラフープのようなものが地球というか、そこを囲んでいてその上に黄金に輝く空がある。

船にはたくさんの人が乗っている、そう、たくさん。

僕がそこであつたのは一組の夫婦。

女性のほうが赤ん坊を抱えていたかは定かではないし、なんとなくしゃべった感覚はあるのだが何をしゃべったのかはわからない。

その人たちと会ったのはどこだろうか？奥に船の内部へつながる扉と丸い小さな窓が見えた気がする。

この船に乗っている人は何かを待っているのだろう。何を？ふと、

これは生まれ変わりを待っているのではないかと考えたが安い考えかもしれない。

無気力で何もうとうとはしない連中が甲板を埋めている。もちろん、近づいておくに行こうとすればどいてくれたりは一応するが、それもあくまで片足分だけ、それ以上は期待できないし期待しない。

僕はなぜか船内へと向かおうとしている。

その途中、多分男だと思う人に話しかけられた。

『君はまだだ』

まだ、何を待っているのかはわからない。だけど、僕の順番ではないことはわかった。

扉を開けるとそこには一人の老人がいた。

白いひげがまるでサンタのように生えていて頭がはげている……
そうだったか今ではわからない。

その老人に何か言われたが、覚えてはいない。

外から声が聞こえてきた。女？……それとも男の声？それも二転三転。

多分、どこかについたということなのだろう。

だが、どこにもついていない。進むことなく、ゆれることなく船はそのままだ。

異変が起こっているのはわかっている。甲板を覆い隠していた数人の男たちが消えていた。

多分、僕は驚いた。

扉から老人が出てきて再び僕に何かを言ったはずだ。

そこには誰もいなかった。

夫婦も、甲板を覆っていたほかの人も、老人も。

気がつけば僕一人、黄金の海の上にたたずむ多分、黄金の船。

次は僕の番だとアナウンスが告げる。

ここにいた時間は長かったのだろうか？それとも短かった？

ここはどこだと呟いたつもりだったがそれは弾けて消えた。

第壱話

視界にうつるものは雑草と砂利。

鼻からなのか、口なのかはわからないが血が出ている。

苦しいが、まだここじゃ終われない苦行。

「お前にこの家を継いでほしいとは言わないが、わが家の使命だけは守ってほしい」

和室で、しかも親族すべてに囲まれてそんなことを言われても困る。

もしもここで『そんなのいやだよ〜ん、エロ親父（笑）』とか言ってみたらどうなるんだろうか？やってみたいがやったら間違いないこの場の全員、五歳児からよぼよぼの八十過ぎの爺どもにぼこぼこにやられたあとお外に放り出されるに違いない。僕の父さん、どうみてもこの浜家をついでほしいって言っているようなものじゃないのか？

ここで僕の一族、浜家について説明を入れておきたいと思う。覚えてたい人はメモの準備をしておいてね♪

浜、実際は破魔。日本では比較的龍の事を神聖視する見方が強いんだけど荒ぶる龍となったら話は別だ。天変地異と同じ災害を発生、農地や村を壊滅状態に陥らせた拳句に人の命まで奪っていく。下手したらその怒りは数週間におよび村が消えてしまうということもあつたらしい。

そこで登場するのが僕たちの一族だ。元は自縛霊などの人外全般

的なものを扱っていたそうだが専門的になり浜家は龍専門となったらしい。

龍が荒ぶる理由はさまざまでありまあ、虫の居所が悪いとかいやなことがあったとか人間にだってありそうなこと以外にも人が敬意を表さなかったなどちゃんとしたものまで本当にさまざまだ。それを説得とか、時には実力行使で鎮めなければならぬのである。人が龍に勝てるのか？そんな疑問を抱くかもしれないのだが基本的に浜家は普通の人間と同じにしていけないのだ。人外を鎮めるために生まれてきた人類。まあ、まれに沈めてしまふ龍鎮めもいたそうだが。

こんなものだろう、ぼーっとしているのも限界のようで痺れを切らした父さんが面倒くさそうに口を開いた。普段は酒飲んでごろごろしているだけの（ついでに言うなら母さんに一切頭が上がらない）そこの親父となんら変わらないが一応ここで会うときだけ威厳がある……気がする。

「で、お前の答えはどうなんだ？もう高校も卒業したし決めてもいい頃合だろう？」

「あーっっ」

さて、どうしたものだろうか？最近では龍自体もあまり見かけない（この前UMAとしてテレビに出ていたのは覚えている）のだがその存在はどうやら結構認識されているようでこの前だって白河邸というところで龍が確認されたそうだ。当主になっても正直言って面倒なことにはしか（父親が見事に当主になってしまったため一緒に遊んだ記憶がない。どうせなら昔からの夢だったらしい投手になってほしかった）ならないのだから却下したい。

僕が暗に拒否しているのは目に見えてわかるのだろう。親父はここで条件を出してきた。

「もちろん、お前のことだからただでならないことはわかってる。そうだな、日常生活を普通にしていってかまわない」

「はあ？」

よくわからない、このおっさんが言っていることは本当にわからないな。なので首をかしげるとおせっかいなおばさん（侮ることなかれ、彼女の實力はあの有名な八岐大蛇と同格らしい）が話を続ける。

「だから、龍輝ちゃんは普通に生活していいのよ？また一人暮らしをしておかまわないし、一族誰かからの要請があったら一度こっちに戻って話をすればいいの」

なるほど、それなら意外と簡単そうだなあとおもって考えているとここで怒声があがった。

「お前はなぜ、当主を継がない！？ここまで譲歩しているのに！」
どすどすどすどすここに歩いてきて僕の胸倉をつかんだのは分家のおっさんではなく、僕より一つ年下の女の子だ。よくはわからないがなりたい人はなりたいのだろう、賄賂などが横行していると聞いてこの前は数人が一族追放の刑になったのを覚えている。

「いや、継ぎたいならお前が継げばいいじゃんか？」

「っ！？貴様今何といった！」

おいおい、この人はいつの時代に生まれた人だろうか？もはや浜家はごく一般的な家計とそんな色ない代物である……いまだに鉄バットで殴つても打撲すら負わない身体だったとしてもだ。

企業の社長になっている人だつてごく一部だし、大体、その能力（身体の頑丈さではない）だつて劣つてきている。

龍を殺して実力的に鎮める、否、沈めることは確かに人間の中にだつてできる人だつているかもしれないが龍の心を平穏にして文字通り鎮め、再び眠ってもらうことができる人はそうそう、というか一般人には殆どいない。

まあ、そりゃそうだな、だから僕たちがいるわけだが……この龍を鎮める能力のほか、もうひとつ、地味な能力だが変身能力を持っている龍を見極めるというのも浜家の人は持っていた。しかし、今では血が薄くなつたとかでどちらかしか基本的に持っていないのだ。だが、僕の胸倉をつかんでいるやつは両方所有しており戦闘能力も

一般的な浜家より上であり、一族最強の名を手に入れている。

「じゃ、こいつが当主ってことにしておいてくれよ父さん、じゃなかった当主様」

「ふうむ、確かに能力が高いことは認めるが……」

重苦しい沈黙が流れていたのだが一人の爺さんが発言したことによつて解散することとなる。

「まあ、今回はここで終わらせよう。次、いつぞや龍様が機嫌を損ねるかわからんからなあ、二人とも考えておくように」

結局前回と同じようなまとまりかたで今回の会議も終わってしまった。まあ、どうせこんなことだろうとは思ってたんだけどね。

僕はいまだに胸倉をつかんでいる相手からさっさと離れてこんな家を後にする。好きで戻ってきたわけじゃないし、一族がどうかそついった話は嫌いだ。集まるときはこついった召集のときだけで正月とかには絶対に集まらない一匹狼の気質が高いのだろうか？

まあ、まだまだ僕にはやらなければ、というかそんなことより大切なことがあるのだ。

第貳話

この程度ではお話にならない。

そんな嘲笑は聞き飽きた。

だから僕は相手を見下すためにがんばった。

実家を出てさっさと歩き出す。そしてケータイを取り出してとある番号に電話する。

「あ、もしもし？問題が起こったってどういことですか？」

『まあ、とにかく以前連絡しておいたファミレスに集合するっさ』
相手はそれだけ言って電話を切る。やれやれ、困ったことに今からそこに行こうとすると三時間程度かかるのだが？三時間も待っていてくれるのだろうか……伝えようにももう相手の電話には一切つながらなかった。

「おい、待て」

「やべっ！」

さっき僕に絡んできたやつの気配と声を感じてさっさと逃げる。

もちろん、相手がものすごく強いことは前々から知っている。ここで相手をしていたら三時間かかる道のりにその分厄介な時間が追加されるということだ。先ほど電話した相手は非常に時間などの規則に厳しい方なのでどちらが優先であるかは決まっている。殴られてうれしいなんて感じる性格というか、嗜好は持ち合わせていないので遠慮しておこう。

「待てったら！」

「待たないよ！」

逃げ出した僕の隣に並んだ相手が手を伸ばしたりしてくる。だが、まだ足の速さでは僕にかなわないはずだ。しかも、すでにゴールである駅はすぐそこで券売機の前には長蛇の列が！大丈夫大丈夫、僕はきちんと切符を持っているから。

「ちっ！」

顔に出やすい性格のために切符を持っていないということがよく、わかった。僕はさっさと切符を駅長に渡してちょうどきた汽車に乗って退散。

「ほっ、さすがにここまで追ってこられないでしょ」

漫画みたいな展開、そうだねえ、思い切り走って追いつき窓から侵入とかそういったものは一切なかった……ともかく、切符を先に買っておいてよかったとほっと胸をなでおろす、だが世の中そんなに甘くなかった！

P L L L L L L L L L

「げっ！？」

最近のケータイの普及率はすさまじいもので都市部へと近づくごとに徐々に低年齢の子達までがケータイを持っている。着信音が汽車内に響いてそれが自分のであるとようやく気がついた。どうやら相手は先ほど追いかけてきたやつのものでどうしても用があるらしい。もちろん、電話に出ずに電源を消すことにする。

「これで安心だな」

ため息をついてそのまま目を瞑る。今日は五時起きだったために少し疲れてしまった。

先ほど別れたやつが永遠と僕を追いかけてくる夢を見たのは内緒だ。

危うく乗り過ぐすところだったが何とか降りることができた。ついでに言うのなら乗ろうとしていた人が数人入りきれずに乗れなかった。かわいそうに、あれをやられると勝ち組と負け組みがはつきりしちゃうからな。

まあ、他人の世話を焼いている暇なんて忙しい僕にはないのである。フォークでご飯を食べるときはフォークの背中に乗せなくてはいけないというのを他人に指摘するのが面倒なのと同じだ、というかいちいちそんなこという連中はいいいだろが。

時間を確認するが、うん、まだ大丈夫。汽車がトラブルなんかで止まることなく二時間五十分で到着、ここから歩いて目的の場所は七分程度。場所はファミレスでの待ち合わせ……別にデートに行くわけではないが気分は普段より少しだけ上。普段だったら絶対男とかおばさんが依頼主だが今回の相手は若い。

もちろんこれは仕事だからお金を貰うことができる。リスク分散型とか言いながらリスクが何なのかわかりづらくなった上に破滅を迎えてしまったどっかの会社の重役みたいに多額の金を貰うわけではないのだがそこそ自分的には満足なお金が出る……はずだ。

切符をさつさと車掌さんに渡してから僕は寂れた駅へと降り立った。まるで天使のように……

ウェイターにすでに待ち合わせている人がいると告げてきよるきよるとしていると特徴的な髪型（長い鉢巻でくくったパイナップルみたいな頭）へと歩いていく。

「こほん、お待たせしました。浜龍輝です」

「あゝ私は緋奈^{ひな}っさ」

鋭い瞳…… そうだな、猫が目を細める途中だな、それでバランスの取れた目鼻に柳眉、引き締まったあごラインにゆったり目の服なので胸がでかい小さいかはわからない。まあ、かわいい子だな…… じゃなかった、こんな若い子がなぜ僕に依頼をしてくるんだろうか？

「それで、緋奈さんはなぜ僕に依頼をしてきたんですか？」

「お、早速仕事の話っさ？ 仕事熱心っさね」

語尾がちよつとあれなのは置いておくとしてまともそうな感じだ…… 彼女は優雅そうに湯気の立つコーヒーをちびりと飲んで目をひん剥いた。

「あつうう！？ こ、これ、あつう！」

口を開閉するたびに赤い何か、オレンジ色の何かがちらちらと見え隠れしていた…… 僕はこれが何か知っている。

炎。

もしかして、この人……

第参話

嘲笑^{わら}った連中は全て沈めてやった。

だが、同時に僕には友達がいなくなつた。

それでも僕はよかつた。

この人は龍だ。そう、しかも人の姿に変身できるがふとしたところ（くしゃみ、咳、おならなど）で火を出してしまふぐらいの恐ろしいぐらいの実力を持った龍。

まあ、龍にもいろいろと種類があつて、ボス、幹部、チンピラ、下っ端みたいな？そんなものがあるのだ。

まず、一番実力が強いのがほぼ自然体の龍だ。

それは見た目でやばいとわかる。ちゃんとした形を持っておらずたとえば、火だったらマグマそのもの。剣とか矢、鉄砲なんかまったくきかない。水をかけても殆ど効かないし海に沈めても行動を続けることができるという恐ろしい存在だ。まあ、この手の龍は殆ど荒ぶることがなく、感情がないのではないかといわれていたりする。

次に比較的能力の高い龍。

先ほどの例と続けて火を吐いたりする龍で扱うが、火山の動きとか普通に動かせたりする龍で活火山だったら好きなときに地面から火を噴かせて相手を襲う。奉られている事が多く、この祠などに対して失礼なことをやらかすともう、大変。へたれ龍鎮めが土下座をしてでもやめたくなくなるようなそんな感じだな。

そして最後が一般的な龍。

翼がなくても宙を漂い、口からその系統の何かを吐き出して暴れまくる。ものすごく低い確率で一応は一般人が倒せるかもしれない存在だが歳をとったものはまず無理だ、元から頭がいい上にさらに知恵をつけているのではめられて終了。まあ、龍鎮めのほぼ本業相手がこの一番下のお方である。やっぱり奉られていたりして普段は恩恵を授けてくれる存在だ。

よって、僕の知りうる中で一番上の自然体の龍を相手にしたときは嘘でもいいから対等に行動しないとイケない。相手のほうが下だとわかったらこの手の龍は人をおもちゃにして……こほん、だから僕はしっかりしないとイケないのである。

「で、早く話を聞かせていただけますか？」

「むあっ？ああ、そうっさね」

猫舌なのだろうか？舌をお冷の氷で冷やしながらそんなことを言う。ううむ、これまた不思議なことなのだが人の姿をしているときに触れても別に熱くはないのが不思議だな。

「こほん、俺っちの友人が実は機嫌が悪いつさ。他の龍鎮めにも話かけたつさがスルーされたのさっ」

そらあ、そうだろうな。この人の友人だったらまず間違いなく相手は自然体。自然体が機嫌が悪い〃天変地異、来たる。それと同じ意味なのだからまず間違いなく首を縦にうなずく馬鹿はいない。

「わかりました、僕でよければやりますよ」

「ほんとうっさか！？やはり、本家の息子はちがうっさね」

喜んでいようだがこれはこれで苦しいプレッシャーだ。本家、本家、当主の息子。おべっかつかつかう連中には愛想が尽きた……とは言わないが金と地位を求める人はいつの時代にもいるもので僕に近づいてくる女性は結構いた……とか一度でも言っただけだ。いせりふだけだね」

「それで、場所はどこかわかりますか？」

「ああ、わかってるっさ。俺っちのぼろいアパートの隣の家なんだけど……」

ぼろいアパート？この人そんなところに住んでるのか……望めば全てが手に入るまるで神のような、いや、実際に神様とっていい自然体なのにそんな貧乏暮らしをしているのだろうか？

住所とどういった相手なのかを教えてもらい、僕は一度別れる。今日中に何とか沈めないと、教えてもらった住所の近くには学校などが建てられていて鎮めるのに失敗したら周りに被害が出るのはまず間違いない、というかものすごいことになる。

想像できる見出しは『日本沈没か！？』『凍結都市来る！？』そんなところだろう。

「……なるほどね、だから最近寒くなつてたのか」

春先なのに、地球温暖化が叫ばれているのに異常な寒さ。他の地方都市なんかはとくに半そでがいるのだがまだこの町は冬が経過していない。

何でもかんでも龍のせいにするのは間違っていると思っただけで、今回ばかりはその龍の仕業らしい。

氷付けにされないように居もしないだろう神様をお願いをして僕は僕の自宅へと戻った。ぼろくはないが綺麗でもない普通のアパート。

「……よし」

準備を全て終えて僕はアパートの鍵をかけて問題の住所へと向かった。

第&a m p ; # 2 1 6 1 2 ; 話（前書き）

拍手が小さいぞ、って何かありましたよねえ？まあ、そんなことはもはやどうでもいいのですが、スーパーか、ハイパーか聞くのが長ったらしかったのでSとHにしました。まったく前書きにコメントすらしてなかった怠惰な作者、今後は努力し改善に努めていききたいと思います。

第& a m p ; # 2 1 6 1 2 ; 話

なぜ、ここまで強くなったのか。

何かを倒したかったのか、何のためなのか。

ふとしたときに考えること。答えは見つからない。

「おまたせっさ」

アスファルトに霜が降りているところを凝視しているとそんな声が聞こえてきた。彼女……緋奈さんが来ただけでアスファルトの霜は溶け出し、僕の身体をねちっこく襲っていた寒波は季節どおりの暖かさを取り戻していた。

「いやあ、昨日の今日のでここまでひどくなるとはおもってなかったっさ」

半そで姿で現れたわけだが、僕はいまだに長袖で彼女に近づけば近づくほど暖かい。

「ううん、それでその、鎮めてほしい龍って名前とかありますかね？」

「ああ、名前？名前は確か……久しくなっていないからちょっとねえ、忘れちゃった」

友達の名前を忘れるなんてひどい話だがまあ、そんなことも長生きしたらあるのだろうか？

「ちなみに緋奈さんはいくつですか？」

あえて失礼だと思われる質問を投げかけてみる。

「俺っち？俺っちはこの世に生を受けて今年でじゅくはちっさ」

「十八世紀？」

なるほど、おばあちゃんだな。

「違う、じゅくはっさい」

「え？十八！？」

「そう、十八」

その見た目相応の歳に少し驚いてしまう。

「ともかく、俺っちのことはいいからさっさと鎮めてほしいっさ。
近所のトメさんが冷害が酷くて畑が酷いことになったって嘆いて
いたから」

そんなことで僕を呼んだのだろうか……？まあ、仕事ですからや
りますけどね。

一軒家でしかもそこらのぼろい家とはぜんぜん違うたはずまい。
僕が泥棒だったら確実に忍び込むであろうその家……雪原邸。ここ
一ヶ月この雪原邸に出入りしたものを見ていないと緋奈さんは言っ
ていたので家族の人達にも何かあったのかもしれない。

覚悟を決めて玄関の扉を開ける、するとものすごく寒い、という
か痛い風が吹いてきた。それだけ目がかすみそうになったが風は収
まり、僕の身体を暖かいものが包んでいた。

「大丈夫っさ？」

「あ、すみません」

後ろからぴったりと僕に抱き着いてくれていた緋奈さんのおかげ
で凍死することなく前に進むことができたのはいろいろな意味でラ
ッキーだったと思う。

「うわ、こりやすげえ」

氷の層が全てを覆っている……玄関に飾られていた花瓶の花はそ
のまま凍っていて、床も天井も何もかも、氷が飲み込んでいて触る
とつるつるだった。

「ふはあ、こりやすごいつさね」

そう緋奈さんが言ったときに再び風が吹き、彼女が抱きしめる。

「……大丈夫っさか？」

「ええ、まあ……それより、深刻なのは外に出れなくなったことですな」

気がついてみればさっき入って来たばかりの玄関が完全に凍りに覆われてしまったことだ。緋奈さんの力を使えば出ることができかもしれないがそうするとこの家が萌えてしまふ……じゃなかった燃えてしまふ可能性もある。

「とりあえず前にすすむっさ」

「そうですな」

ともかく、今出来ることはこんな状況にしてしまった龍を見つけることだけだ。見つけてから鎮めるか沈めるか決めればいい。

靴を脱ぐことなくそのまま土足で入り込みあたりを見渡すがもちろん見つけることなんて出来ない。廊下は左右に広がっており右からいくか、左に行くかでしばしの間考える。

「二手にわかれるっさ？」

「……そうですな、僕は左から行きます」

「じゃあ、俺たちは右から」

気をつけていくっさよと言われたがさっきみたいな風が来れば一発で凍ってしまうのは目に見えてわかつていることだ……だが、僕の燃える心は凍らせることができないはず！……ごめん、強がり。

天然洞窟なんじゃないかなあという気持ちで廊下を歩いていると人影を見つけ、近づく。

「……こ、凍ってる……」

そこに居たのはダンディーなひげを生やした一人の男性。なんだろうか？ええと、こまねちっばいポーズで固まっており笑ったほうがいいのか真剣に悩んでしまった。

「……駄目か」

とりあえず溶かそうとライターを近づけてみたのだが効果なしのようだ。火炎放射器とか持ってきたところで一ミリ程度しか溶かせないだろうな。

やはり元を断たなければいけないだろう、僕は滑らないよう慎

重に廊下の奥へと歩いていくことにした。

第伍話

あの馬鹿みたいに強いやつに会ったのはいつのころだっただろう？

圧倒的な力で僕に襲い掛かってきた。

だが、僕は何とか……撃退できたんだと思う。

「こつちに地下にいける道があるっさよ！」

声が聞こえてきてそちらのほうに急いで走る。途中、天井から生えていた氷柱が落ちてきて床に刺さったが難なくよけることができた。けどまあ、あれ刺さったら痛いんだろうな。

緋奈さんは四つんばいになっており四角い穴を覗き込んでいた。一応階段があるようだが凍りついていて約四十五度の傾斜を作っているためもう完璧に滑り台みたいな扱いで滑っていくしかないようなものだ。

「で、どっちが先に下りる？」

ものすごくわくわくしたような顔をこちらに向けているのだが……先に行きたいのだろうか？

そう思っただけでみたのだが首を振った。

「いやいや、ここは親指を立てて先に両手を抜いたら勝ちのあのゲームできめるっさ」

「……なんです、それ？」

「ほら、ちつつちつつぱらうち？っていうあれ」

「……ああ、それですか」

わかっていると思うがパパラッチではない。

「ぐはっ！いてえっ！！」

結果、勝った僕が先に滑っていく権利を得たわけだが壁にぶつかって止まり、しかも皇族となる緋奈さんが滑ってきて壁と緋奈さんに挟まれるという惨事が起きた。いろいろと勝手に想像していたのだが見事に軌跡が顔につけられてしまった。

「……龍輝君、いたっさ」

首をぐりぐり動かしていた僕がなんとか立ち上がる……そこには天井と床を一つにつなげる大きな氷の柱があった。それに巻きつく幻想的な龍……どこから降っているのかわからない雪が僕らの前に姿を現していた。

「ああっ！！」

「ど、どうしたんですか？」

「名前、確か氷月！」

「氷月……」

再び龍、氷月へと視線を戻すと身を震わす。それだけで天井にできた氷柱が僕らを襲う。

「くっ！！」

大きな約一メートルの氷の剣が天井から落ちてきてはじける。

「大丈夫っさか、龍輝君！」

「ええ、何とか……」

緋奈さんは落ちてきた全ての氷柱を炎で溶かしていた。うらやましい……僕も龍に生まれたかった。

「くしゅん」

氷月がそんなくしゅみをすると氷月を中心にして今度は床から氷柱が生えてきてそのままこちらへとそれが続く。

それも一応よけるにはよけたが氷月へと続く道全てに氷の剣山ができてしまったために僕一人では近づけなくなってしまった。そう、僕一人では。

「緋奈さん、あれを溶かしてください」

「わかったさ」

緋奈さんが右手をかざすだけでそこから火が吹き出る。緋奈さんを前にして僕らはそのまま一気に突進していくと氷月は再びくしゃみをした。

「緋奈さん、今度は横から氷柱が！」

「わかったさ！」

熱波が氷柱を襲い全てを水にかえてさらに蒸発させる。この緋奈というひとものすごく力を使うのがうまいことにいまさらながら気がついた。僕が知っている自然体はあたりを飲み込むことしか知らない。

何とか氷月まで近づけたのはよかった、しかし、これからが問題なのだ。

「あゝ僕の言葉がわかりますか？」

「……」

シカトされてしまった。ここで基本的には強制的に相手を鎮めなければならぬ。しかし、この龍もしかして……

「くしゅん」

そんなかわいい声を出しながら凶悪そうな顔から、性格には鼻や口から鼻水やつばが飛んできて僕にかかる。

「……」

それだけで僕の体の六十パーセントが固められて動けなくなってしまった。そして確信した……この龍、風邪引いてるだけだ。

「だ、大丈夫っさ！？」

「え、ええ何とか……」

すぐに緋奈さんに溶かしてもらえたが（服が一部焦げたが）これは困ったことになった。僕は正直言って医者じゃない。龍に人間の

薬が効くかはわからないが一応風邪薬を与えたほうがいいのだろうか？

第六話（前書き）

第四話が間違いなく文字化けしていることに気がついてうれしくなりました。いやあ、生まれて初めて文字化けというものを視ました。三回ぐらい見間違いではないかと確認しましたが物凄いや数になっただけでもう、感動物でした……。気がついてみたら第六話まで言うており、これからさきの事を期待してくれている読者様がいればなあと思つています。感想とか評価がありましたらぜひ、よろしくお願ひします。

第六話

そいつは当主になりたいといっていた。

私は当主になるためにがんばってるといった。

僕はなぜ自分がここまでがんばったのか知らない。

「ううん、風邪っさか……」

「そうです、何か知恵とがありますか？」

「まかせるっさ！」

さすが龍！龍のことは知っているとばかりに彼女はすぐに行動を起こしてくれた。

実力行使で。

「はあああああああああ！！！！！！」

「え！？」

緋奈さんを中心にして温度が急上昇しているのが手に取るように、肌が熱風を感じるためにわかった。彼女の足元には陽炎が出現し、それまで覆っていた氷があっさりと解けていき彼女は氷のなくなった床に降り立つ、だが、それでも満足し切れなかったのかごぼつという音がして、床がさらに解け始めていた。

この部屋全てに熱風がいきわたり、それまで僕らに牙をむいてい

たはずの氷柱なんかあっさりと溶けて僕の頭上に落ちてきた、固形じゃなくて液状で。

「あつうっ!？」

それはすでに沸騰したお湯だ、氷柱とか冷たい何かじゃない。一般人にかかっていたら確実にやけどしていた代物である。というか、それ以前にここに人間が居たらあっさりと蒸発してしまう……もちろん僕もいずれそうになってしまっだろう。そうする前にどうにかしなければならぬ。

「ちょ、ちよつと緋奈さ……」

「はあああああああああ!……!」

どうやら聞こえていないようだ……しかも、口をあけるだけで熱波が口に入り込んできて肺を焦がそうとしている。

もはや、ここに居ては命がなくなってしまうことがわかった。僕は急いで地上へとつながる階段へと逃げ込み、それを一気に駆け上がった。行きは大変だったが今では普通の階段になっていたことにほっとする……もしも上れずに滑ってまたあの地下に行くようなことがあったら笑うに笑えない。しかも、熱気が後ろからついてきているのがよく、わかる。

何とか地上へと戻ってきて気がついたのだが、どうやらまだこちらに熱気は襲って来ていないようだ。だが、油断はできない……階段付近の氷は解けて温泉よろしく湯気を出している。効能はなんだろうか？

とすつ、べちゃ。

「え？」

馬鹿なことを考えていたがそんな音がして近くをしてみる。

するとそこには鋭利な氷柱が刺さっていた……と思ったら一瞬にして溶けた。これまでは振動が何かで落ちてきたであろう氷柱はいまでは熱波の影響で解けているために落ちて来ているのだろうか？気

がつけば氷が解け始めており、足元は水浸し状態。もはや一刻の猶予もなくなってしまったようで急いでこの家から退避しなければならぬようだ。

もと来た道を逃げる途中、氷付けのおっさんが消えていることに気がついたが、もはやこまねちの氷像などどうでもいいことだ。今は自分のわが身がかわいいのである。

必死の思いで扉の前まで来るとあのおっさんが体当たりしていた。こちらに気づいてこういった。

「おお、誰かは知らないがここを突破するのに手を貸してくれ！よくわからんが出られないのだ」

分厚すぎる氷の壁が僕らを阻んでいる。僕も急いでけりを食らわせてみたりした。躊躇している暇がないのは暑い日、アスファルトに打ち水をして景色がゆがんで見える現象がすぐそばまで近づいているからだ……。あっさりと水は蒸発していて床はばきばきという音をたてている。

「……暑い……」

熱波がそこまで着ており急激に気温が上昇。おっさんは額から汗を流している。氷も徐々に解け始めているのだが全て解け終わるころにはきつと僕らが解け終わっているところに違いない。

となりでおっさんが倒れ付した。

「ああ、雪子、雪子、お父さんは今帰ってきたぞ」

しかも走馬灯を見始めたらしい……。どうやらタイムリミットが近づいているようだ……。しかし、万事休すと思っていいたら暑さが下がり始めていた。

「……え？」

「……ふう……」

おっさんはそのまま気絶。生きていることを確認して緋奈さんを確認しに行くことにした。

第七話（前書き）

夏のレジャー、あなただったら山派？海派？雨月の家のピアノはヤマハですが……………どうでもいいことですね、はい。まあ、どうせ夏は家でゴロゴロ程度で終わってしまうんでしょうけどねえ。こんな夏こそ身体を鍛えましょう！外で遊ぶときは紫外線対策とボウシをきちんと装着していきましょう！

第七話

当主はお前の予定だ。

そういわれたときうれしくもなにもなかった。

ただ、友達が一人減ったぐらいだ。

廊下内部は見事に変化しており窓なんかぐにやりと割れていた。それだけで熱波がどれだけすごかったのかわかるが今では再び寒くなってきたおり、足元には再び霜が折り始めていた。

先ほどの恐ろしい熱波のことを含めて不思議に思いながらも地下へと続く階段までやってくるとやはりそこも変化しており、既に熱で形状がぼこぼこになっている。落ちないようにしてゆつくりと地下へと下りることにしたのだった……。

「ひ、緋奈さん!？」

先ほど力を解放していた場所、そこには倒れている緋奈さんと、刀のようなものを持った一人の女性が立っているのを見て取れた。

「貴様が、このような無礼な龍をつれてきたものは!」

冷徹なまなざしに背筋をひやりとしながらも、冷静な頭は相手が怒っているのがよく、わかった。だが、そのまま見捨てて逃げるといふのも人として問題があると思われたので急いで緋奈さんに近づいて起こす。

「だ、大丈夫ですか？」

「一応は……氷月、記憶失ってるっさ」

「氷月？私はそんな名前ではない。わたしの名前は雪子、雪原雪子

だ」

「……」

雪子？どこかで聞いたことがある名前だな。って、さっきおっさんが言っていたような……

考え事をしていると雪子と名乗ったその女性は冷機を纏っている刀をこちらへと向けてくる。

「貴様ら、どこの賊か知らないが、私の家に忍び込むとはいいい度胸だ。ここでたたきつけてくれる！」

「え？ええっ！？」

刀だと思ったそれは鋭く上がった一本の氷柱のようなもの……その切っ先が消え、気がつけば目の前にいきなり現れそれを躊躇なく突き刺そうとしてくる。冷徹な瞳が一瞬だけ僕を捉え、無意識で身体が反応する。

「くっ……！？」

「ほほう、やるな」

危うく心臓を貫かれそうだったがそれを掴むことが出来た。所詮は氷柱だ……切っ先部分にしかダメージなんてないだろうと思っていたらそれは甘い見通しだったようだ。

相手は離れたが僕の手は凍っていた。

「え？」

「私のこれを素手で掴む愚か者は残念ながらお前が初めてだ……霜焼程度では済まんぞ」

淡く笑って氷柱をこれ見よがしに見せ付ける。相手は触っているのだがそれはあの雪子という人物には当然のように効かない様だ。

冷たいという感覚が既に痛みに変わっている手を押さえて困っていると声が聞こえた。

「……龍輝君、ちよつとみせるっさ」

「緋奈さん……」

彼女に両手で包まれるだけで凍っていた両手は人のぬくもりを得ることができる。いや、人じゃないんだっけ？それなら龍の？それ

ともマグマの？

その光景を雪子は見ており、忌々しそうに舌打ちをする。

「……お前ら、何が目的だ？私の龍の力か？以前もそのような輩が来たが私はもはや龍ではない、単なる人だぞ」

どうも相手は根本的に勘違いをしているようだ。これはもしかしたら無駄な争いをしなくて済むかもしれない。

そういうわけで僕は両手を高く掲げた。意図がわかったのか、それともまねただけなのか………緋奈さんも同じように両手を上げる。

「実は話を聞いてほしいんです」

「話？何だ？死ぬ前に何か残したいのか？」

「いえ、実は僕たち近所のトメさんの畑が冷害のために酷い有様になったと聞いてやってきた龍鎮めなんです」

「龍鎮め？」

「ええ、それでこの家が元凶だという事でこの龍………緋奈さんと一緒にやってきてこの地下で一度龍を見つけました。風邪を引いているようだったので治したんですが……」

詳しく事情を説明し、一生懸命身振り手振りでがんばった。がんばった結果がいつも報われるわけではないが何とか今回は報われた。「すまなかった！責任は取る！」

「やめてください！」

「やめるっさ！」

報われた結果として雪子さんは自害しようとしていたのだが。

「ここ一ヶ月間の記憶がないのと風邪を引いて暴れまわっていたとは……事実のようだし、やはり責任を取って……」

「ここら、雪子やめなさい」

ソファーに座ってお茶を静かに飲んでいたおっさん（雪子さんのお父さん）が娘？の手を止める。

「お客様の前でそのようなお見苦しいまねをしては駄目だ。このたびは助けていただきありがとうございます」

深々と頭を下げられてしまったのでどうしたものかと思っていると緋奈さんはうんうんとうなずいていた。

「やっぱり十七年前と何もかわらないっさ」

「十七年前？」

すると緋奈さんは一才だ。

「病院であつてその病院が氷付けになったっさ。原因が夜鳴きで今日みたいなのがその病院でもおこったっさよ」

想像したくなかった。

「そのときおじさんも今みたいに謝っていたっさ」

僕は額に手を当ててため息をついたのだった。

ぐだぐだな感じで終わりを迎えてしまったのだがどうにか依頼をこなすことができた……で来たのはよかったのだが、ここで一つ残念なことがおきた。

雪原邸の隣にはぼろいアパートがあり、先ほどの熱波は地下から隣のアパートを攻撃しダメージをあたえていたらしいのだ。

彼女の住むべき場所は燃えて灰になっていた。

第八話

普通の人とは仲良くなれた。

だけど、親戚関係の人たちとは仲良くなれなかった。

一族は一族のために生きろという言葉が僕は嫌いだ。

「何で龍輝君がいるっさあっ！！！」

「ごがぺっ！！」

理不尽な一撃が僕のみぞおちを見事に捕らえ、そのまま部屋の壁と激突する。ずどんという重い衝撃音をたてながら、ついでに言うのなら部屋全体がマグニチュード一程度に揺れて、僕の身体はたたみに沈んだ。

ああ、なんて理不尽すぎる一撃なんだろうか……

「いやあ、ごめんっさ。寝起きはいつも勘違いしちゃって」

「……まあ、いいんですけどね」

雪子さんの一件があつて緋奈さんの住んでいた場所は燃え尽きた（本人はいまだに被害届を出している、加害者のくせに）のだが、それではさすがにかわいそうだったために僕の家を誘っておいだ。もちろん、次の住居が見つかるまでの期間限定なのだが。

こんな綺麗な人と一緒に住めてうれしいなあとか最初は思っていた、だが考えが甘かった。寝起きのたびに（朝絶対起こしてくれといわれているため）殴られる……その一撃は龍であるがゆえに重く、身体を何か熱気が伝わるのを感じる。気がついたら内臓がこんがりなっていたらものすごく嫌である。

緋奈さんは一人暮らしをしていたといっていたために家事ができると思っていたのだが考えが甘かったようで辛うじて喰える無味無臭の謎の料理、まるで小学生がかけたようなへたくそなアイロン、朝干したときは普通だが必ず夕方には地に着いて汚れている洗濯物、落ちているものの全てを飲み込むために掃除機はあるのだといっているような掃除の仕方。

二人で効率が上がると思っていたのだが結局のところ僕が世話をしているようなものだ。かわいいから全て許せるとかそういった考えを僕は持っていないことを先に伝えておこう。

「邪魔するぞ」

そして、前回の龍静めのときに雪子さんと知り合いになったためか、彼女はよほど暇なのだろう……大学生か高校生か知らないが平日しょっちゅう遊びに来るようになった、しかもまだこちらは朝食の時間帯なのだがお構いなしに上がってくる。育ちのいいくせして礼儀には無頓着なのだろうか？

「……あの、雪子さん？」

「何だ？ああ、朝食はもう食べてきたから気にしないでくれ」

おいしそうだがなと付け加えてくれたことには感謝しよう。一応この台所を受け持っているのは僕だから。

「いえ、その、友達とか……もしかしていないとか……？」

「……」

悪寒が背中を襲う。ものすごく、寒い……ほら、近くの食パンが凍ってる！

「……あ、あゝ僕たち友達ですよ？だから友達の家に来たんですよ？」

雪子さんと僕の間、力の関係は間違いなく彼女のほうが上だろう。雪子さんの逆鱗に間違っただけじゃなかった気がした僕はこびへつらうということしか解決策を知らない。

「そうだそうだ、私はお前たちと友達だから毎日遊びに来てるんだよ。お前らもうれしいだろう？」

その間、緋奈さんはさっさと食事を終えている。問題ことは起こしたり持ってくるくせしてこういふときは一切干渉しない処世術を身につけていたりする。結局のところ触らぬ神にたたりなしって話だ。

「ああ、そういえば龍輝は龍鎮めなんだろう？」

「ええ、まあ」

「あの連中は基本的に一人暮らしとかしないんじゃないのか？」

今は一人暮らしじゃないが一応今は二人暮らしだ。

「ちよつといろいろとありまして……」

「ふうんそうか、けどお前はなんだか変な龍鎮めだな」

僕の両手を氷付けにしたあの氷柱を取り出してなにやら手入れをしているようだ。それ、手入れ必要なんだろうか？この件に関しては無干渉な緋奈さんは布団をたたもつとしたが再び寝ようとしていた。

「ちよつと、食べた後に眠るのは行儀が悪いですよ……で、どこが変なんですか？」

僕は変なのだろうか？どこら辺が？洋式のトイレに座るとき絶対後ろを振り返ることとかかな？あれって不安にならない？

「あゝ言葉には言いにくいな。威圧感？龍鎮めだったらすぐにわかるんだけどなあ、変な感じがするんだよ、会った時から。ああ、もちろん私は龍じゃないからそんなの単なる気のせいかもしれない」

よく言うよ、普通の人間は氷柱を思うように取り出してさらにあの熱波を耐え切るなんて絶対にできやしない。

「会ったときってあの地下のときですか？」

「ううん、違うな……なんだろうな？よくわからん」

それだけ言っただけで伸びをする。隣の部屋からは寝息が聞こえてきて

緋奈さんの隣にいつの間にか雪子さんは移動していた。

「私も寝るか、お休み」

「……………」

この人たち、何がしたいんだろうな？忙しくないのだろうか？

僕は大学があるのでさっさと朝食を終わらせて準備を終える。

「じゃ、僕は行って来ますから静かにしておいてくださいね」

「ZZZ………」

「乙乙乙……………」

家に帰る前に夕飯の食材を買わなくてはいけない。必要なものは……そうだな、今日はスパゲティをいためてそれにんにくとか混ぜるシンプルなやつにしよう。そう思って安売りをしているスーパーへと歩き出した。

「……………あ」

「お」

スーパーのところまで言ったのだがそこに居たのは分家のあの子、若手実力ナンバーワン、ついでにいうなら自称、他称僕のライバル。そう、名前を言いそびれたが浜真帆。どうでもいいことだが浜名湖って昔言い間違えたことがあった。

もちろん身を翻して逃げようとしたが相手のほうが今回は動くのが速かった為（残像が見えた気がする）にあっさりと右手を掴まれてしまった。振りほどこうとしても万力のように締め付けられる。

「お前、どうしてケータイに出ないんだ？ケータイは何のためにある？電磁波でお前の脳みそを壊すためか？」

どうやらあの着信無視の事をまだ根に持っているらしい。一応メールで謝った……つもりだったが。あのときの着信結局その後も続

いていたりしてストーリーカー並の百件を超えていたりする。

「はははは……いやだなあ、もちろん電話するためでしょう?」

「じゃあ何故でない?」

出たら永遠文句を言うつもりだろうに……苦情言われるってわかって出て出る人なんてクレーム受ける会社の姉ちゃんたちぐらいだ。

一応言い訳を言ってみよう。あくまで一応だから効果のところは期待しない。もしかしたらここで喧嘩になってやりあっちゃうかもしれないし、近隣のかたがたに多大な迷惑がかかってしまうかもしれないがそれはそれ、これはこれ……なんて通用しないんだろうな
「ええと、ほら、うちって電波が悪いし」

「嘘つけ、前掛けたときは正常に話せたぞ」

「そうだっけ?あ、ああつ、そうそう、ほら、なんだか電話に出たら恨めしい女の声がするし」

「私の声か?」

「……」

八方塞です、どうするべき?何か言い訳の材料を考えたのだが見つからなかった。助けてくれる人を探してみたがみんなニヤニヤしながらこつちを見ている……どうやら見ている連中は僕が彼女とのデートをすっぱかした上で浮気をしていると考えているらしい……おいおい、それならもう一人はどうした?出せるものなら三角関係のもう一角を出してみろや!

そんなことを半ば考えていると夕日を浴びながら一人が走ってきた。

「おい、龍輝君!」

きた、三角の一角を占める人が空気を読まずに否、読めずにやってきた!

「龍輝、散歩がてら迎えにきてやったぞ!」

よ、四角!?近くのおばさんたちがめちゃくちゃ驚いてるぞ!?こんな展開想像してなかったみたい。どろどろだねえ〜とかつぶやいた小学生、お前は昼間学校でメロドラマでも見てるのか!?

「…………… たっちゃん、もしかしてお前……………」

彼女の瞳がずっと細まる。そう、この真帆は人間に変身している龍のことが一発でわかるのだ。しかも、基本的に龍鎮めは龍と一緒にいてはいけない決まりだったりする。

「そうか、たっちゃん…………… そこまで一族のことが嫌いだったのか？」

僕の右手をつかんでいた感触がなくなり、気がつけば真帆は僕から離れていた。

「まあ、嫌いといえば嫌いだね。どうせ今だって陰口ばかりたたいてるような連中だもん」

「そうか、確かにそうだな…………… ところで、何故龍がたっちゃんを慕ってるんだ？」

実に不思議そうに首をかしげている。龍に嫌われやすい性質の人と逆を行く人というものがあり、僕は嫌われやすく龍沈めに行くと相手の逆鱗に触れたかのように切れまくる。だが、真帆が行くだけで場は和み、これまで数件だけ真帆が何をするでもなく近づくだけで静まってしまった現金な龍様もいたのだ。

「まあ、成り行き上で……………」

慕ってるんじゃないくてきつと今晚のおかずを聞きに來ただけに違いない。それならメールで送ればいいのに。

「成り行き上か……………」

なにやら考え込むようなしぐさで真帆は僕に背を向けてエコバックを背負うようにして去っていった。

「龍輝君、今の人は誰っさ？」

「親戚」

「そうか、龍輝にも親戚が…………… じゃああいつも龍鎮めだな。だが、いやなやつだな、雰囲気か」

鋭い瞳を消えた真帆に送りながら雪子さんははき捨てるようにそういった。珍しいものだな、真帆が嫌われるなんて……………。

「ま、そんなことより早く俺っちに料理を作ってくれっさ」

「そうだな、今日は私もこっちで食べる。ああ、アレルギーとかないから安心しろ。もちろんすでに家には連絡済だから」

「……」

緋奈さんは食費を僕にくれているため（どこから出ているのかは不明）に料理を作るのはわかるのだが雪子さんはおかしいと思う。だけど、そんなこと言ったら氷付けにされて夕飯の代わりにぱり食べられるかもしれん。だから、僕は言わない。長いものには巻かれるだっけ？あの言葉僕大好き。

第九話（前書き）

物凄く申し訳ないのですが以前のタイトルはあくまで仮称のものでした。結果として教えてもらいスーパ―はハイパーの下であることが判明しましたのでここに明記しておきます。ご迷惑をおかけしてしまい、誠に申し訳ありません。

第九話

助けを求められれば手を差し伸べた。

困ったことがあっても助けなんていらなかった。

そんな僕に干渉してくる一族はそうそう居なかった。

夕食がおえてゆっくりとしていた時間、風呂場のほうから声が聞こえてきた。

「龍輝君、シャンプーが切れてるっさ」

「あゝはいはい、近くにおいておくから」

詰め替え用のシャンプーを手にとって風呂場へと向かう。覗き……そんな行動をとったらどうなるか想像もつかない。朝目の前に僕の顔があるだけで鳩尾に冗談抜きで一撃食らわせるような人物なのだ……よって、そんな無粋な、というか恐ろしいことはしない。

すりガラスの向こうでは緋奈さんが立ち上がるところが見えた。

どうやら僕が来たのがわかったようだ……さっさと非難した方がいいなと思っていたら予想だにしないことがおきた。

ガチャリ

「ありがとっさ」

「……」

ボタン

い、今のは？今のは……なんだったんだろうか？事故か？わざとか？天然か！？しばしの間ぼけーっとしていると向こうで音楽を聴いていたはずの雪子さんの声がしてきた。

「あ！龍輝何してるんだ！デバガメかこの変態め！！」

「ち、ちがうんですうう！！」

「じゃあお休み龍輝君。また明日の朝俺っちを起こしてっさ」

「ええ、わかりました」

ピンクのパジャマ姿である緋奈さんが眠たそうに目をこすりながら自室へと引っ込んでいく。僕は雪子さんによって形状が変化するまでぼこぼこにされた顔に氷（雪子さんが作ってくれたもの）をつけていた。……南極の氷と北極の氷ってどっちが冷たいのかな？

「じゃあ、私ももう寝るから明日起こしてくれ」

「ええ、わかりました雪子さん……なんていうとも思いましたか？」

すごく自然な形で僕の部屋へと入り込もうとしていた雪子さんの前へ立つ。間違ってもこの人の肩をつかんじゃいけないのは前に氷柱を掴んだときに実感した。触れたら低音やけどする人なのだ、この人は。

「なんだ、私は忙しいんだ。眠い。美容は肌の対敵だとしらんのか？」

「ちょっとまってください。いいですか、あなたの家はここじゃないでしょう？」

どうせ肌の手入れとかしてないくせに……あんた、今朝着たときから顔にめやにがついてますよ……とかいえない。恐いもん。

「そうだな、そりやまあ、そうだわ。ここは龍輝の家だからな」
よしよし、それなら話は早い。

「帰ってください、今すぐに！」

「おいおい、今何時だって思ってるんだ？二十三時過ぎてるんだぞ？こんな時間に麗しい乙女が夜道を歩いたら襲われるだろう？」

「大丈夫です、見た目は麗しい乙女かもしれませんが中身は阿修羅か羅刹ですから。連中、次からは雪子さんのことを恐怖の大魔王と呼びますよ、きつと」

へらへら笑った後に気がつきや羅刹が氷の槍をのどに引っ付けてぺたぺたとする。神速の動きに何もできずに手を上げる。

「……と、ともかく！なんでここに居るんですかつ？」

「おいおい、緋奈は居ていいのに私は駄目なのか？お前、緋奈と一緒に住んでやましいことしよって魂胆だろ？」

そうはさせるかという瞳をちらちらとこちらに見せている。一向に氷の槍は僕から離されていない為にここは慎重に話さねば命が危ない。説得力のある会話を心がけねば！

「いやいや、そんな気持ちはこれっぽっちもありませんよ」

「本当か？」

「本当です」

「そうか、それならいいんだ」

そいつって結局僕の部屋へと入っていく。結局、命は助かったが……僕も寝るか」

しょうがないので雪子さんが消えた僕の部屋と向かったのだが……

……

「待て、何でお前がここにいるんだ？お前はあっちで寝ろ」

「はあ？何言ってるんですか？」

「彼氏でもなんでもない男と一緒に寝れるか」

「それならこっちも同じです！雪子さんがあっちで寝てくださいよ」

「客には部屋を提供するものだろう？」

「知りませんよ」

「ともかく、あつちで寝ろ。寝ないと永眠させるぞ」

「……………」

理不尽だ。ものすごく、理不尽だ。力が上だからって暴力で解決する人は大嫌いだ。

「……………天罰でもあたっちゃえ」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

どうせ羅刹が寝ている部屋では危険なことが起こるに違いない。

寝相で人死に出たら笑うに笑えないし、それが自分だったら目も当てられない。だが、まあ……………そんな横暴する人にこのまま屈するのもなんだか人として間違っている気がする。王様倒すために人は革命を起こすのだから……………僕だって下克上ぐらいやってやろうじゃないの！

「……………はあつ……………」

昨夜、いびきがうるさすぎて寝れなかった。あれからいろいろと仕返しに顔にマジックで落書きしようとしたら見事に酷い目にあった。まさか部屋に入った瞬間氷の槍が飛んでくるとは思わなかったのだ。しかも立て続けに永遠と……………本当に永眠するところだった。

「……………緋奈さん、朝ですよ、朝」

そしてこれもお約束……………

「何で龍輝君がいるんですかあああああつ……………！」

いい加減、なれてほしい。

壁に激突してむせている僕に雪子さんがあくびをしながら近づく。

「龍輝、パン焼いてくれ」

あんたは一日でなれすぎだ。

第壱零話（前書き）

記念すべき第十話？ですね。ここからまた新たな話が始まる予定です。

第壱零話

一つ大きな事件が起こった。

そこで怪我一つ負わなかったのは僕だけ。

それが当主への更なる近道となってしまうた。

「はあ、なるほどなるほど」

高校生では非常に大変だった仕事の話（県外へと赴くことが殆どできなかった）だが大学生となってしまうた今、金はないが時間はあるのできちんと聞くことができ、向かうことができる。以前は慌てて聞いてしまっていたために横浜と福島を間違ったりして酷い目にあった。

「じゃあその龍は人目にわからないように悪事を働いていることっさね？」

「ええ、そうなります」

よくわからないのが緋奈さんが首を突っ込んでいることと……

「じゃあ私たちがこれから様子を見てくる。場合によっては沈めてしまうこともあるから念頭においていただきたい」

「わかりました、お願いします」

雪子さんがいることだな。

「あの、何で二人がついてきてるんでしょうか？」

「それはもちろん住む場所と食事を提供してもらっているからっさなるほど、緋奈さんはわかった。」

「じゃあ何故雪子さんが？」

「何だ？ そんな要らない心配はしなくていいぞ。自分の身ぐらいは守れるからな」

そらそうだろうなあ、あんたはまったく人の話聞かないうえに話がかみ合ってねえことに気づいてすらいねえ。

一族の基本的なルールとしては協力で仕事をしたらまったく同じ料金でやらなければならないのだ。つまり、どれだけ能力が高い連中が低い連中と仕事をして同じ値段。ボーっとしているだけでお金は稼げるのである、後者の場合は。だが、ボーっとしていたらあっさりと龍に葬られてしまう可能性が高い。

とにもかくにも、屈指の実力を誇っているこの二人がついて着てくれることは非常にありがたい。

現地へと赴く費用はなんだかんでもめたのだがじゃんけんによって僕が支払うことになり、じゃんけんを持ちかけたのが僕だったために文句を垂れることもできずしょんぼりと切符を三人分片道で買うことになった。片道なのは……一族のおきてで下手したら死人が出る、だから片道だけ買うのが決まりだそうだ。

「龍輝君、駅弁かってっさ」

「ええっ！？ ちゃんとお弁当は作ってきましたよ。緋奈さんの好きな梅干の入ったおにぎりもたくさんあります」

すそをひかれながらもそうやって緋奈さんをなだめる。

「お、そうなのか？ それなら昼は楽しみだな」

なんだかなあ……やっぱり龍と人の感覚のずれて存在するんだろうな。これからどんな相手かもわかんないやつともしかしたら戦うことになるかもしれないのにお気楽なことだ。

ふと、自販機を見つけそういえばのどが渴いていたことを思い出

す。

「あ、すみません、僕オレンジジュース買ってきます」

その後、買ってきたオレンジジュースを二人に取られてしまった

…まだ一口しか飲んでないのに！

第巻一話（前書き）

さて、つける題名があるのならつけたほうがいいのでしょうかあえて言うなら前回からの話『始祖龍編』とでも言いましょうか？この物語に出てくるとある家系を築き上げてきたものの末路と残したものの結果として今この話があるというなんとも歴史を感じる話です。今あなたがくしゃみをすることで百年後の世界が変わっているかもしれないよ？

第巻一話

あの事件が誰のせいなのか僕は知っていた。

当主になりたかった一人の少女のわがまま。

報告することもないだろう、僕は黙っておいた。

「あ！龍輝君、山！大きな山っさ！」

「緋奈、田んぼが永遠続いているぞ！ほら、龍輝も見えてみる」

「……………あの、二人とももっと静かにしてほしいんですが？」

何だろう？この二人はまるで子どものように車窓から見える景色に嬉々として叫んでいる。周りの人の生暖かい視線が痛いし、何より僕の隣に座っている雪子さんが僕の太ももに乗っているのがおかしいことだと思う。痛いし、恥ずかしいし……

もう一度注意しようとして二人の目がものすごくきらきらしていてそれを取り上げるのはやめたほうがよさそうな気がした。周りの人たちは理解力があつたのか、注意してくる人はいなかった……相変わらず生暖かい視線が続いていたのだが。

「いやあ、田舎っさね！」

「空気がうまいな！」

二人して伸びをしている。くそう、またここでも僕はじゃんけん

に負けてしまったために一人で三人分の荷物を背負っている。

駅から続く道の隣には田んぼがずっと続いており等間隔程度に趣のある民家が太陽を受けて存在している。

「ほら、二人ともとりあえずええと、上田さんだっけ？その人の家にいこう」

「わかったつさ」

「わかった」

僕の家に来ていたのは上田さんの使いの人だったらしい。上田さんは多忙の人のためにこちらに来る都合が一切つかないがどうやら僕の一族と何らかの関係があり、うわさによると全ての龍鎮めに何らかの連絡手段を持っているそうだ。

上田さんの家はそこの小さな民家とは比べ物にならないほど大きな屋敷で、通された部屋も取り替えられたのか知らないが畳のいいにおいが漂っており上田さんがやってくるまで緋奈さんと雪子さんがごろごろと転がっていた。

「初めまして、上田猛といいます」

上田さんが来たときも尚、いまだ鼻をくんくんと緋奈さんは動かしていた。それほどたたみのおいが気に入ったのだろうか？

「初めまして、浜龍輝です。早速ですがこちらで龍が出ると？」

「ええ、そうなんですよ。ここからもう少し山に登ったところに祠がありまして、この前山へと向かったときに壊されていることに気がついたのです。それがちょうど一ヶ月前、龍による被害だと思われるものが今日までに三件です」

上田さんがいった起こった被害が三件、一つ目が中規模の川にこれまで見たことも無い渦が発生し、犬が飲み込まれた。二つ目が水道管も局地的な豪雨も起こっていないのにマンホールがはじけ跳んだ位の水の反流。最後が川とダムの水位の異常な上昇でこれが非常に危険だ……次に豪雨なんかがきたらあっさりとダムなんかが決壊する。

話を聞いて祠へと向かう途中、雪子さんがしばしの間沈黙してい

た。騒がしい人なのにどうしたのだろうかと首をかしげていると手を引かれた。ひんやりとしていてとてもすべすべしている。

「おい、龍輝……この話ものすごく危ない気がしないか？」

「危ない？何で？」

「なんだろうな？なんだかものすごくいやな予感がするんだよ……清流は青龍に通ずる……って言葉をどこかで聞いてな、ここは水がものすごく綺麗な場所だ。ここで氷を作ったら最高のものができるって私は思う」

「はあ、それで？」

「ともかく、気をつけるだけ気をつける。危ないと思ったら無理せず私と緋奈に任せてお前は逃げろ」

逃げる何て言葉が雪子さんから出てくるとは思わなかった……少しだけ感動して笑ってみせる。

「大丈夫ですよ、何とかなるはずです。緋奈さんと雪子さんがいてくれますから」

「……まあ、そうだな」

緋奈さんはずんずん一人で前に進んでいき、山の中腹辺りにある祠の前へとたどり着くことができた。

「ありやりや、本当にぼろぼろっさ」

「誰だろうな？罰当たりなことをしたのは……きっと龍は仕返しを考えてるんだろうな」

壊したやつをこの田舎ごと水没しようと考えているのかもしれない。てつきり祠に納められているものを狙ったのかとももったのだが中に納められていた札のようなものと短刀が無事に鎮座されている。

緋奈さんと雪子さんはあたりをきよろきよろと探し回っているが何も見つからないようだ。

「ふむう？ううん……」

しばしの間、実際にここに龍がいたのか気配を探るために集中してみる。変身した龍を見分けることはできないが、龍の気配が残っ

ていれば、少しでも一応はわかる。
だが、その集中は別のものを生み出していた。

第壱二話（前書き）

そんなに暑くない夏……如何にお過ごしでしょうか？きっとクーラーとかあまり売れていないんだろ？なあ……まあ、暑いところは暑いままなんでしょうけど。最近へたれてきた自分にしよげつつも、更新しました。感想または評価をしてくれる人がいましたらよろしくお願いします。作者の元気の源です。

第壱二話

あれから負い目を感じたのか？

あの子はさりげなく僕を助けてくれた。

だが、僕は助けられることを拒みたかった。

「龍輝、ボーっとしてないでしっかり周りを見る」

震えるような声が聞こえてきて目を開ける。するとそこには祠なんてなくて祠があった場所には、というより山自体が消滅しており背後には巨大な滝があるだけだった。滝からは清流が流れており僕らの目の前にある家へと清流が向かっている。

「きつと、俺っちたち引き込まれたっさ」

頭をガシガシ掻きながらため息をつく緋奈さん。引き込まれ……そう、龍は自分の世界のようなものを作ることができ、そこに迷い込んだ人間は神隠しなんていわれたりする。そんな馬鹿な話なんてあるかよって思っていたが実際に自分が体験してみるとこれはこれですごいことだ。

目の前の家の引き戸を引くと、そこには意外な人物が立っていた。

「真帆！？」

「たっちゃんか……」

鉢巻にジャージ姿のどこからどう見てもリレー途中の姿で真帆が立っており、その手にバトンが握られていれば完璧だなあと無駄に考える。

「どうしてここに？」

「わたしは一族から連絡があつて白河始祖龍を鎮めた場所全てで不穏なことが起こっているといわれたから一つの祠に来たんだが気がついたらここにいた。そっちは？」

「俺っちは龍鎮めというか、龍の被害の話を聞いて現地にむかつたつさ。そうしたらこうなつたつさ」

僕の代わりに緋奈さんが答えてくれている間、僕はぐるっと見える範囲でこの家を見る。

この家は浸水でもしているのか床上一センチ程度水が張られており歩きたびにぴちゃぴちゃという音がしている。泥棒なんかが入ったら一発でわかりそうなものだ。壁に触れると水のように波紋が広がり木造のようだが木に触れているような感覚はなくまるで見ず風船に触っているかのような錯覚を覚える。

引き戸はすでに閉まつておりあけることができずまた、壊すこともできなかった。

「たっちゃん、この家はどうかやら右回廊と左回廊に別れてるようだ」
雪原邸のこととも思ひ出す。ちょうど人数は四人だ。

「んじゃまあ、ここで二手に別れますか？」

「たっちゃん、それは得策じゃない気がするぞ」

確かにそうだがどれだけ広がっている家なのか気になる。まともな行動していて畏の一つで全滅という自体だけは避けたかった。

「ともかく、これからじゃんけんして勝ったチームは右、負けたチームは左からつてことで」

「わかつたつさ」

「いいだろう」

「……」

「いいのか、たっちゃん」

「何が？」

「わたしなんかと一緒に」

「別に」

じゃんけんの結果として僕と真帆、緋奈さんと雪子さんとなった。まあ、僕は誰と組んでも相手のほうが実力は上なのだから守られる側となってしまうのだが……。

ぴちゃぴちゃという音が響いているが時折窓から外の光景が見ることができた。そこはすでに水の中にありこのガラスが割れてしまえば僕らはおぼれてしまうこと間違いなしだ。廊下の広さは三人分ぐらいあり、縦は二メートルぐらい。右側にはふすまがあるのだが何をしたらって開かない。鮮やかな花の絵が永遠とかかれているがそれは古ぼけている。

「……なあ、たっちゃん。わたしが死ぬ前に聞きたいことがある」

「おいおい、死ぬ前ってこれからお前は死ぬのかよ？」

「……わたしたちの仕事はいつ死ぬかわからないから」

ふんと鼻で笑い飛ばして真帆は続ける。

「……あの時、わたしがしたことを何で当主に言わなかったんだ？」

「ああ、あれか……」

高校二年のことだっただろうか……

「そりゃま、言ったらどうなるか知っているからな。一族に逆らうようなことをしたやつは全員行方不明だ。それに、僕が報告してもメリットなんてないだろ」

「……たっちゃんは相変わらず愚かだ。わたしはこれから先もう一度だけ大騒動を起こすぞ」

その目が嘘をついていないのを横目でちらりと確認する。ぴちゃぴちゃという音だけが廊下に響いており、他には何も聞こえてこない。

「そのときわたしは……絶対に手をぬかない」

「……………」

僕はそれに対して答える言葉などもちろん見つけられなかったし、見つける必要もないなと感じた。後手後手に回っていたとしても未然に防げるほどその相手はやわな相手じゃない。

「……しかし、この廊下はどこまで続いているんだろうな？」

「多分、ずっと、永遠にね。一度戻ってみよう」

「そうだな」

振り向き、歩き始めるその後姿はプライドの高い精神が見え隠れしているような歩き方だった。

第巻三話（前書き）

サブタイトルがめちゃくちゃだ！と思う人もいますかもしれませんが、ご勘弁願いたいと思います。あ、それと誤字脱字とか発見してしまった方はそつと胸の中に仕舞い込んだりせず、教えていただけるとうれしいです。伝える方法は何でもかまいませんよ？電話、メール、評価、メッセージ、電波、全国放送……あ、テレパシーなんかもいけるかもしれません……こんな作者にも誰か愛の手を！感想、評価お願いします。

第壱三話

悩んだ末に僕が求めた答え。

はいつてはいけないといわれていた部屋へ向かった。

神と呼ばれるものに会うために。

「たっちゃん、戻れないな」

「ああ、そうだね」

もと来た道に戻っていたつもりなのだが一向に戻ることはできない。腕時計はあれからすでに三時間を経過していることを示していた。おかしいことに真帆の持っている時計と僕の時計では示している時間かなりの差が生じている。

まあ、こんなおかしい建物の中にいるのだ。戻ってきたら霊長類が世界から消え去っている可能性でさえ否定できない。そんな浦島太郎のような途方もないことを考えながら歩いていると立ちくらみのような感覚を覚えた。

「……今、ゆれなかった？」

「確かにゆれたな……」

二度、三度そのゆれは僕たちを襲い、徐々にその頻度と強さが大きくなってきている。

「どうなってるんだよ？」

「……くうっ!!」

すでにそのゆれは以前社会化見学が何かで体感した震度七のそれと同じ、またはそれを越えるほどのゆれになっており、立つことな

ど不可能で床に四肢をつけて揺れが治まるのを待つが、一向に治まる気配など見せなかった。

それでも何とかここから脱出するために真帆の手をとりふすまに手を掛けるもそのふすまがこれまでは何をしようと開かなかったのにあっさりと向こう側へと倒れ付いたのだった。

それと同時にゆれはぴたりと治まった。まるで貧乏ゆすりを指摘された子どもみたいに……

「たっちゃん、あれは……なんだ？」

清流が流れる小川、その小川に腰掛けて足を涼しげに水面につけたり放したりして遊ぶかのようにしている一人の女性。女性は青い着物をまとい、黒々とした髪を後ろで束ねていた……そして水面に映っている彼女の姿は人ではなくまるで見ずそのものの姿をした巨大な龍だった。

「……あれが始祖龍か……」

真帆はおもむろに近づいていくが、それ以上は近づけないのか歩を進めるのをやめて顔色が悪くなる。

その時間が永遠に続くのだろうかと思っているとこちらのほうへ女性が顔を向ける。

「……どなたが存じ上げませんが……何か御用でもあるのでしょうか？」

まるで切れるかのような視線、真帆は顔を伏せており、僕にも直接目を合わせるだけで何かを失ってしまうという恐怖心を視線だけで与えてくる。

だが、それはあくまで相手に対しての警告であり、嘘をつかずに誠実に答えればそうそう龍は人を苦しめたりはしない……もっとも、その相手がおかしくなっていたりしたら話は別なのだが。

「え、え」と、実は道に迷ってしまっただけにやってきたんです。」

「道に迷った？」

「ええ、外にあった大きな滝のところから家の中に勝手に入ってしまいまことに申し訳ないとは思っているんです。それで、どうにか

して出ようと四人で手分けをしていたところあなたに会ったというわけなんです」

「それは本当ですか？」

嘘をつけばどうなるか…… ゆっくりとした歩調でこちらへと向かってきており真帆は気がつけば僕より後ろ、やはり恐いのだろうか？そして、この質問に答えるべきはやはり僕だった。

「ええ、本当です」

「……いいでしょう、唯一つだけあなたに聞きたいことがあります。今すぐにここにいるあなたのお連れの方全てを元の世界に戻して差し上げますが、その代わりあなたは少しの間だけここにどまつてもらいます」

「……わかりました」

「おい、たっちゃん！」

そんな真帆の声が聞こえたので大丈夫だよといおうと振り向くとすでにその姿は存在しておらず、向こうのほうにつり橋がかかっているのが見えるだけだった。

「……本当に今すぐなんですネ」

「あら、せめてお別れの言葉でも言わせて上げたほうがよろしかった？」

にこりと笑うその姿にいえ、そういうわけではとだけつぶやいておく。

「……覚悟はよろしいでしょうか？」

「え、ええ……」

何をされるかわからないが、僕は身体が硬直するのをとめられなかったが、相手の目を見ることにした。

第壱四話（前書き）

予定的にこの龍輝の話は三部作のつもりです。つまり、ある程度のさわりまでやったら後は凍結する恐れが……あくまで恐れですが、凍結する可能性を先に提示しておきます。この小説を読んでくれる方々には多大な迷惑（きつとしない……くうっ！）をかけることをお許しください。では、どうぞ進んでください！

第壱四話

そこで白い龍に出会った。

ただにらみつけるだけでしかない龍に僕は話をした。

そして、そして僕は……

「あの人、信じられないんですよ！私というものがありません……」

「あ、あ……そうなんですか……」

何をされるかわからなかったが、どうやら僕は愚痴を聞いているようだ……永遠と。時間なんてめちゃくちゃですでに時計は先ほどから長針が逆行、短針が見えないほどの速さで回転を始めている。

秒針なんか一周したら逆周りへと移行するのだ。もはやこの時間が意味を成さないのを示している。

「ちよつとちゃんと話を聞いているんですかっ!？」

「聞いてます、聞いてますから!」

ちなみにここでプチ情報だが進んで聞くほうは聴くという漢字である。

「その、あなたの夫が他の女性にも優しいのが問題だということですよね?」

この人は間違いなく龍だが、この人の旦那さんは人間らしい……。彼らがどういった経緯であったのかはわからないがよくもまあ人が龍と一緒に生活できたものだ。気難しい龍が多いのにその人は難なくこれまでやってきたようだが嫉妬を抱いたこの龍はその愚痴を僕

に言い続けている。

「そうです、そのとおりです！」

美しい女性だと思っていたのだが今はものすごく悔しいとばかりに藍色のハンカチを千切れんばかりに噛んで引っ張っている……昔の漫画みたい。

「ええと、それで旦那さんはどうなったんですか？」

ものすごくこの先どうなったのか旦那さんの末路が気になってしまふ。今頃どこかに監禁されているのか……それともそこで見事な花を咲かせてくれている桜の根の下に……いたりしてね。

「あの人は閉じ込めてやりました。封印してもらったんです！」

「え？封印って……人間を封印するなんてできるんですか？」

「やろうと思えばできます。“こーるどすりーぷ”でしたっけ？あれも捉え方によっては封印だという人もいますよ」

「はあ、そうなんですか……それで、あなたはどうしたいんでしょうか？」

「ここから出してあげる代わりにその封印した私の夫を連れてきてもらいたいです。場所はわかっています」

告げられた場所を聞いて僕は自分の頬が硬直していくのが手に取るようにわかった。だが、この表情を悟られないようにまじめな顔を演出する。

「では、今からあなたをそこへと向かわせます……絶対に抵抗したりしますから、あなたもそれなりに強いでしょうが私の夫も非常に手ごわいということを頭に入れておいてください」

「まっつさあつー！！！」

清流から一人の女性が現れる。天に髪の毛先を向けてまとめている萌える……じゃなかった燃える熱血龍？緋奈さんが現れたのだ。

「あら、龍輝さんこの方は？」

「ええと、僕と一緒にこの屋敷に迷い込んでいた一人です」

「ああ、そうでしたか……見るところまだ生まれて間もない赤ん坊のような龍ですね」

にこりと緋奈さんへと微笑みかけてこちらへと向ける。目じりが下がっているところを見ると子どもとかが好きなようだ。

「あの方の龍輝さんへの信頼はとても強いものだわかります……二人で私の夫を連れてきてください」

「は、はあ……緋奈さん、すみませんが少し手伝ってもらえますか？」

「はあ？なにをつさ？」

首をかしげる緋奈さんの手を取り、着物の女性の前へと立つ。

「では、お願いしますね」

これから向かう場所、過去一度だけ僕がそこへと出向き、開けてはならない扉を開けてまであった人物……

向かうべき場所は龍沈めに力を貸してくれている神様のような存在の人の元へだった。

第巻五話

それから僕がすべきことは一つだった。

僕を必要としてくれる人を探すこと。

そのために僕は独りでいえないといけないと知った。

「ここは……どこっさ、龍輝君？」

そういつてきよるきよとあたりを見渡している。無理もないだろう……ここはまるで坑道のような場所で薄汚く、内部の空気を循環するためのダクトや決して綺麗とはいえない水がすごい音をたてながら流れている地下の場所だ。よく騾の為だろうけど悪いことをするとここに放り込まれていた気がするな。

「ここはですね、僕や真帆の龍鎮め一族があがめているまあ、一般的に言って神様がいます場所ですよ」

「それは……龍っさか？」

首をかしげている緋奈さんに歩きながら話しますといつてさて、どうやって話そうかと考える。

「……以前、この先にある部屋のような場所へと向かったんです。普段は絶対に入れないように厳重に警備がされていて……赤外線とか張り巡らされているんですよ」

「赤外線？当たったらレーザーが当たるやつっさ？」

「まあ、そんなものです……あの時は無我夢中で進んでいたんで見事によけたんでしょうかね？それから十個の鍵一分以内に解除し

て中に進入しました」

「……え？スパイツさか？龍輝君ってスパイツさ？」

「いえ、普通の龍鎮めです……それでその、部屋の中には一匹の白い龍がいました」

あのときの光景は今でも忘れない……神々しくも荒ぶれており、普通であり異常。形容しがたい光景を形容しようにもまだそれだけ長くは生きていないという実感を持たせるに等しい存在だった。

そして今、僕たちの前にその扉はあり、あの時一人であけた扉を今度は二人で開けることができる。

「この扉、重いんですね……」

「じゃあ、俺っちに任せるっさ」

「いえ、僕がこちらを引きますのでそちらをよろしくお願いします」
「わかったっさ」

せえの！という掛け声をかけ、その重たい扉を開ける……その先に待ち受ける一匹の龍を見るために。

「あもう、龍輝君、どこにその龍がいるっさ？」

「あれ？」

そこには何もなく、六畳ほどの部屋がありテレビやタンス、そのほか日常生活に必要なものがおかれていた。

「あ、ちやぶ台の上に何か置かれてるっさ」

メモのようなものを取り上げて、そのまま読み始める。

「……これを読んでいるという事はついにあいつが俺を始末しに来たに違いない……いわれのない非難だ、これは！きつと俺をあいつの元に連れてくる使者がやってくる……死神だ、きつとそいつらは俺にとつての死神に違いない！こうなったら逃げてやる。龍鎮めの長にはきちんと話が通っているはずだし、少しの間なら大丈夫のは

ず……そのうちにどうにかして対策を立て直すために……だからこれを読んでいる者に一つ提案したい。協力し、俺をどうにか救ってくれるというのなら……以下に書かれている場所へ来て欲しい……とかかれています。それで龍輝君、どうするっさ？」

首を傾けてこちらのほうを見てきている。え？それってどういう意味だろうか？

「もちろん、決まっているっさ。さっきの女の人の言うことを聞くのか、それともこの手紙の主の人に協力するのか……二つに一つさ」

「え、ぼ、僕は……」

どうするべきなんだろうか？あの龍に会いたいという気持ちもあるのだし、しかし、話はあの女性のほうの話を聞いてきているわけだから人としてここにいた人を連れて行かなくてはいけない。それに、嘘をついたらあの女性恐そうだったし……とりあえず、一度戻って話をしたほうがよさそうだ。

どうやって戻ろうかと考えたところで携帯が急に鳴り出す。

「真帆からか……」

この場所が圏外になっていなかったことに驚いたがとりあえず通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『あ、たっちゃんか……まずいことになった』

「え？」

ここであ、おいやめろという声とともに相手が代わる。

『龍輝、落ち着いて聞いて欲しいがああのは完全には壊れ、中から一匹の龍が出て行った。お前、中で何かあったのか？緋奈も消えたままだし……』

「緋奈さんはここにいます。しかし、龍が飛び出したって……」
そしてまた携帯の奪い合いをしているような音が聞こえ、声が聞こえてくる。真帆のようだ。

『まず、間違いなく何かを探しているような感じだった。しかも、

仕事の携帯のほうに当主様の番号が出てる。きつと緊急招集だ。

あぁっ、こら、やめろ……」

『龍輝……現状がよくわからないから私はお前と一緒にいたほうがよさそうだ……だから今から一時間後にお前の家で落ち合おう』

「え、雪子さん……もう今日の電車は通りませんよ……」

あの二人が祠の前にいるのはわかったが、急いで帰って来ようにも明日にならない限り電車が通るはずがない。タクシーなんておそろしいぐらい料金がかさむはずだしどうやって帰ってくるつもりだろうか？

結局、その後のことはわからず携帯を争って何かが壊れるような音が聞こえた。

「……それで、俺ったちはどうするっさ？俺っちが思うところあの女性はここにいた人物を探すために出たと見て間違いないとおもっさよ？」

「……とりあえず、雪子さんの言ったとおり僕の家を集まることにしよう……僕は一度一族の会議に行くから先に行ってって言うてもここからは三時間ぐらいかかるし……」

困った事だなあと考えていると緋奈さんが意外と豊満なバストをたたいていった。

「任せるっさ、空は器用に飛べないけど俺っち、面白いことができっさ！」

「へえ、それってどんなことですか？」

「緋奈さん、僕は今後絶対にあなたと一緒に空を飛ばないことを約束します」

「ええっ！？何故っさ！？」

地獄は死んだ後に見ればいい。そういうわけで僕は九死に一生を終えて家に帰宅したのだった。あれからまだ一時間程度しかたっていない……どんな方法で戻ってきたのか、想像してもらいたい。

第壱五話（後書き）

作者の切なる願い……どなたか評価お願いします。

第巻六話

僕に一人の友人ができた。

いや、二人。

人じゃないけど、いい人たちだ。

比較的落ち着く和室。『知』と書かれた文字が誤字であると同時にこれを書いたのは緋奈さんだ。僕のケータイを覗き込んでいる。

「……龍輝、緋奈に近づきすぎだ」

「え？別にそんなに近づいてない気がするんだけど……」

「いや、駄目だ。近づきすぎだ」

雪子さんに引つ張られてケータイは緋奈さんが一人で見ていた。送られてきたメールは父さんからのものでその内容は『全龍鎮めに連絡、今日以降近くの白河始祖龍の封印を確認せよ』そんなものだった。

引つ張られた僕はつんのめってそのまま雪子さんの腹辺りに激突。
「お、おいっ！何してるんだ！」

もちろん、雪子さんは怒っておりいいにおいがしたが急いで顔を離す。

「誤解です、何もしてません」

「お前、わざとやったんじゃない……」

「違います！好き好んで誰も雪子さんに引つ付こうと思っやつなっています！まるで鬼ですから」

そついうとものすごくショックを受けた顔を始める雪子さん。

「な、い、言うに事欠いてそんなことを……龍輝、お前いつも私のことをそんな風に見てたのか!？」

そして涙を流し始める。

「え、ええっ!?!いや、別にそんな泣かなくてもいいじゃないですか……すいませんって、謝りますから」

「うぐっ……龍輝の馬鹿野郎っ!!!」

馬鹿ヤロー馬鹿ヤロー馬鹿ヤロー……そんな響きを残しながら雪子さんは出て行ってしまった。

「……龍輝君、俺たちちもそろそろ行くっさ」
「行くって……どこに？」

「このばかげた騒動をとめるためっさ」

確かにまあ、ばかげた騒動ではあるのだが相手が相手だ。人間が束になってもかなわない、しいて言うなら龍鎮めが束になってもかなわないような相手なのだ。

「けど、どうやってとめるつもりですか？」

そういつた僕の目の前にくしゃくしゃの紙が一つ提示される。

「それ、持ってきていたんですか？」

あの部屋に放置されていたメモである。

「そうっさ、ここに行けば全てが終わるはずっさ」

「……まあ、もうそれしかないだろうけど雪子さんはどうするんですか？」

出て行っただまだ。いつごろ帰ってくるのか見当もつかない。

「帰ってくる前に決着を着けるっさ。多少強引であっても俺たちが考えてる方法がきつと最善だといえるっさ……龍輝君、ついてきてくれるっさ？」

差し出された右手を取るべきか、とらざるべきか悩んでいたが緋奈さんが信じていることを僕も信じてみるべきことだろう。少ない間だが一緒に生活を送っていたのだから、彼女の信頼に値する人間だと自負してもいいはずだ。

彼女の手をしっかりと握り、僕はうなずいた。

「ええ、行きましょう」

指定されている場所は一時間程度でいける川辺で、そこには大きな橋が架かっている場所……そこに僕たちは向かうこととなった。

第巻七話

夢と現実が違うとしても

かなわない夢だと知ったとしても

僕はそれでも前へ進もうと思った。

向かった場所にはすでに着物を着た女性とぼろいマントのようなものをまとっただけの男性が立っていた。

「間にあわなかったさ！」

「くそう！どうすれば……」

両者はお互いににらみ合い……そう思ったのだがどうやら違うよううで両手をぶんぶん振り回しているのが男性だ。

「だから、誤解だ！俺はお前以外に好意を抱いたことなんてない！」

「嘘をつかないでください……この写真は何ですかっ!？」

突き出された写真に男性はじつと見入る。

「これは……その、単なる写真だろ？別にどうのこうのって話じゃないし……」

「もう話し合いの余地なんてありませんから」

それだけ言うとうと着物の女性が発光し、次の瞬間には宙を舞う青い龍になっていた。目が血走っておりそれに呼応するかのように川辺の水が風もないのに沸き立ち始めていた。

「……緋奈さん、どうにかできませんか!？」

「……実力で排除するには相手が強すぎるっさ……」

男性のほうも気がつけば発光し、白い龍へと、以前見たことのあ
る白龍へと姿をかえていた。その神々しさに見ほれることもはや
なく、どうすればよいかぜんぜんわからなかった……

青い龍と白い龍が激しい攻防（一方的に青い龍が白い龍をぼこぼ
こにしているようにしか見えない）が繰り広げられており、その間
僕らは下でボーっとその光景を見入っていただけだった。

「これが……これが神とあがめられてきた龍同士の戦い……」

「龍輝君、現実逃避をしている暇はないっさ！あれはどう見ても嫉
妬に狂った女性が男性を指しちゃうようなお昼のドラマみたいな感
じっさ！」

いや、僕もわかってるよ。及び腰になっているあの白龍をどうに
かして助けないといけないのは誰だって知ってるさ。

「どうすればいいんだよぉ！」

「俺っちがとめてみせるっさ！」

言うが早いか右手を青い龍へと向ける。次の瞬間、おそろしいほ
どのマグマが右手から噴出し、宙に浮いている液体状の龍へと襲い
掛かった。

激突し、蒸発した水が白く天へと上っていく……だが、それだけ
だった。青い龍の追撃は尚のこと変わらず効いていない様だった。

「そんな……これが聞かないなんてありえないっさ。寒天だって一
瞬で溶解するのに」

たとえばしょぼい所為でいまいち威力がわからないだろうがあ
の威力ならどんな建物だって一発でとかせるはずだ。きっとゴ○ラの
光線にだって負けてないレベル。

いまだ宙で戦闘を繰り広げる龍たち。人間の介入など不可能なの
かと思ったのだが、一っだけ青い龍の動きを止める方法を見つけた。

「緋奈さん、今から白い龍のほうを狙ってください」

「え？何で？」

「いいから！」

そのまま駆け出して落下してくると思われる場所へと移動する。

緋奈さんは僕の指示に従って動いてくれており、先ほども威力は弱そうだが（もつとも、あんなものをくらって原型をとどめていられる自信はない）動きの早い火球が白い龍を追いつめ始める。青い龍と赤い龍との攻撃を受け、必死に回避する白い龍がものすごく不憫に感じたが解決方法はこれしかない……というより、青い龍が好きなだけばこってしまえば何とかなるのではないかと考えたのである。

白い龍は力尽きたのか、そのまま僕の目の前へと落ちてきた。今では龍の姿ではなく人の姿で転がっており、あれだけ火球をぶつけられていたのに一切怪我なんて負っていない。どの程度の実力を保有しているかわからないが耐久力はすさまじいようだ。

「おとなしくあの青い龍に怒られてください」

「おい、俺に死ねって言うてるのか！？え、ちょ、ちょっと待って！」

気がつけばあの着物の女性が白い龍だった人の足を掴んでいた。

「……たまには一緒にいないとやっぱり私のことを忘れてしまうんですね？ふふっ、楽しみですね」

「え、いや、俺は……頼む、助けてく」

れ……を言い忘れたまま、白い龍だった人は消えてしまった。

「龍輝君、何とかなっただっさ？」

「まあ、多分……」

こうして、また一つ面倒な話を終わらせることができた……と思っただった。だが、一つ忘れていたことはあの祠のあった山での事件。みんなは覚えていただろうか？あの場所は今では静かな場所に再びなったそうで祠も再建されたそうだ。

「雪子さん、機嫌をなおしてくださいって」

「知らない」

「まあ、雪子許してやるっさ」

「はあ、何で？」

あれから三日後、ようやく雪子さんが発見された。忘れていたとかいったら確実に殺されてしまったろう……。あまり活躍しなかったし。

「まったく、たちちゃんは相変わらずだな」

「真帆……どうにかしてくれ」

「何でわたしが……。それより、たちちゃんに面白い依頼がきてる」
一つの紙を貰って僕はため息を一つついたのだった。

第壱七話（後書き）

えゝと、非常に投げやりのな、言い訳のような、聞いているだけでいらいらするようなことかもしれないませんが続編が読みたい人がいたら教えてくださいっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4772h/>

龍と書いてドラゴンと呼ぶ！ ～ 龍鎮め、夢と現実～

2010年10月8日14時45分発行